

## 『摂南大学教育学研究』第13号発刊にあたって

『摂南大学教育学研究』編集委員会

委員長 吉田 佐治子

このたび、『摂南大学教育学研究』(Bulletin of Educational Research of Setsunan University) 第13号が完成いたしましたので、発刊いたします。

本誌は、摂南大学教職支援センターの教員及び教職課程を履修した卒業生を中心に、教育の理論および実践的交流誌として発刊するもので、教職支援センターの研究事業として13年の歳月を刻むこととなります。

2016年は、国内外で大きな変化があった年でした。中でも、イギリスのEU離脱、アメリカ合衆国の大統領選が特に印象に残っています。これらの報道に接しながら、ベルリンの壁崩壊とソビエト連邦解体のことを思い出しました。当時学生だった私は、「まさか」と思いながらTVや新聞をみていたことを覚えています。

世界の変化のスピードは、ますます上がっているように思われます。「米国で2011年に入学した小学生の65%は、大学卒業時に今は存在していない職に就く」「2030年までに、今ある仕事のうち約半数がなくなる」と話題になったのも記憶に新しいところです。「まさか」が「まさか」でなくなることが、これからますます増えていくのではないのでしょうか。

このような時代を生きていく子どもたちに、私たちおとなは何ができるのか。子どもたちに、どのようになってほしいのか。改めて問うてみる必要を感じます。

子どもたちと多くの時間をともにする教員の役割は、ますます重く、ますます大きくなっています。2015年12月の3つの中央教育審議会答申は、これからの学校や教員のあり方を示しました。それに伴い、教員養成のあり方も変わろうとしています。「先生になりたい」という学生をどのようにサポートしていくか、教職支援センターとしても考えているところです。

本学の発展と共に教職課程の教育内容がますます充実していくための一助となるために、この『摂南大学教育学研究』が役立つことを願っています。

2017年1月31日